山県周南の教育論における荻生徂徠の影響

――「達材成徳」語および「民の父母」語を中心に――

牛見真博

一　はじめに

萩藩校「明倫館」の創設に関わり、第二代学頭を務めた山県周南（一六八七～一七五二）は、若くして江戸の荻生徂徠（一六六六～一七二八）に学び、徂徠門下では最も早い時期からその薫陶を受けた一人である。のちに徂徠が樹立した、朱子学に敢然と抗する学問体系としての徂徠学にも深い理解を示し、生涯を通じてその継承と喧伝に努めた。実際に、山県周南の教育思想的背景には、『弁道』『弁名』といった荻生徂徠の代表的著作における教育論が、かなり色濃く反映していることに気付かされる。

山県周南の教育論については、当該研究の嚆矢である河村一郎『長州藩徂徠学』（注①）に、次のように述べられている（注②）。

周南の教育論は、要約すれば、「達材成徳」を目的として、「大器大成、小器小成」―すなわち個人の能力の全的な発現を求めるところに帰着する。（中略）この考えは、徂徠の教育論を踏襲するものであった。享保五年と思われる周南宛の書牘（『徂徠集拾遺』周南宛第一書）において徂徠は、「詩書礼楽、先王之妙術、其教各殊。君子学之、以成其徳。材小者小成、材大者大成」と教示している。以後、「達材成徳」は周南だけでなく長州藩徂徠学を貫くモットーとなり、例えば滝鶴台は事あるごとにそれを強調し、「某氏意見書」においてもそれは藩政改革のスローガンの一つとなっている。

ただし、河村氏の論考は「以後、『達材成徳』は周南だけでなく長州藩徂徠学を貫くモットーとなり」とまで述べる「達材成徳」語について、周南宛の書牘を出典と見做しており、徂徠の他の著作に遡り、具体的に「材」や「徳」の語に着目して論述されたものではない。また、徂徠の影響は「長門国明倫館記」（『周南先生文集』巻七）の「民の父母」語にも見られるが、この事実については未だ等閑に付されている。

そこで小論では、山県周南の教育論における「達材成徳」語および「民の父母」語に着目し、そこに見られる荻生徂徠の影響について考察していきたい。

修得することに努めていたことが窺える。

古文辞とは、明の李攀龍（一五一四～一五七〇）・王世貞（一五二六～一五九〇）によって提唱された復古の文体である。金谷治氏は「徂徠学の特質」（注④）において、次のように解説している。

それは宋・明の詩文を否定して、盛唐の詩を模範とし漢以前の文体にかえろうとしたもので、一時的ではあったが当時の文壇を蔽う大きな勢力となった。徂徠のころでは、すでにその形骸化した修辞の模倣性と難渋さが鋭く批判されて、当の中国ではもはや時代おくれの文体となっていたのであるが、しかし徂徠は四十歳ごろに始めてそれに接して強い印象をうけた。それを目にすることができたのは「天の寵霊による」ものであり、それを研修すること十年にして始めて徂徠学は完成した、と自覚されている。徂徠の学を古文辞学とよぶのはこのためである。ただその名の一致から徂徠学のすべてを明の古文辞の影響とみるのは、もちろん誤りである。

明の古文辞学と徂徠学とは決して同義ではない（注⑤）。小論ではひとまず、明の古文辞学の主張に示唆を受け、古代中国の文献は訓読ではなく、中国語で理解するべきであるという方法論によって、六経の全体を把握し、天下を安んずる先王の道に近付こうとした学問を徂徠学としておく。こうした徂徠学の学問的性格は、『弁道』における朱子学および伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）批判からの照射によって示される（注⑥）。

二　山県周南と徂徠学

山県周南が荻生徂徠に師事した様子は、同じ徂徠門下の服部南郭（一六八三～一七五九）の「周南先生墓碑」（『周南先生文集』巻十）に述べられている（注③）。

年十九東遊。師事物夫子。夫子以修古為本。経義文章。皆由是出。時方始唱。和者蓋寡。独有滕東壁従焉。先生至。則大説其学。与東壁相視切劘。夫子亦自称得其人。爾後物家之学日興。従者益盛。遂至海内靡然嚮風。吾党至今以二子羽翼。伝為称首。居東三年。業成而帰。（年十九にして東遊し、物夫子〈荻生徂徠〉に師事す。夫子修古を以て本と為す。経義文章、皆是より出づ。時に方に始めて唱和する者、蓋し寡く、独り滕東壁〈安藤東野〉有りて焉に従ふ。先生至れば則ち大いに其の学を説き、東壁と与に相視て切劘す。夫子亦自ら其の人を得たりと称す。爾後、物家の学〈徂徠学〉日に興り、従者益々盛んなり。遂に海内靡然として、風に嚮ふに至る。吾党今に至りて二子〈周南・東野〉の羽翼を以て伝へて称首と為す。東に居ること三年、業成りて帰る。）

宝永二年（一七〇五）、周南は徂徠に入門した。これによれば、周南は体系的な徂徠学確立以前からの弟子であるが、「修古を以て本と為す」、すなわち当時すでに古文辞学の立場に立っていた徂徠の学問思想に触れながら、徂徠が打ち立てようとしていた学問体系の根基を

程朱諸公。雖豪傑之士。而不識古文辞。是以不能読六経而知之。独喜中庸孟子易読也。遂以其与外人争者言。為聖人之道本然。又以今文視古文。而昧乎其物。物与名離。而後義理孤行。於是乎先王孔子教法不可復見矣。近歳伊氏亦豪傑。頗窺其似焉者。然其以孟子解論語。以今文視古文。猶之程朱学耳。・・・又未免和語視華言。（程〈明道・伊川〉・朱〈熹〉の諸公は、豪傑の士なりと雖も、古文辞を識らず。是を以て六経を読みて之を知ること能はず。独り中庸・孟子の読み易きを喜ぶや、遂にその外人と争ふ者の言を以て、聖人の道もと然りとなす。また今文を以て古文を視、而してその物に昧く、物と名と離れ、而る後に義理孤行す。是に於いてか先王・孔子の教法また見るべからず。近歳、伊氏〈伊藤仁斎〉亦豪傑にして、頗る其の似れる者を窺ふ。然れども其の『孟子』を以て『論語』を解し、今文を以て古文を視るは、猶之れ程・朱の学のごときのみ。・・・又未だ和語にて華言を見るを免れず。）

伊藤仁斎の唱える古学は、『孟子』の解釈を通して『論語』を理解しようとするものであり、今文によって古文を理解しようとする点で朱子学と同じであるとする。また中国語により原典に直接あたらなければ、その本義を理解することはできないというのが徂徠の批判する内容である。

徂徠はまた、詩文の習得にも重きを置いていた。『政談』に次のようにある（注⑦）。

詩ナドハ無益ノ筋ノ様ニ理学者ノ申ニ依テ、白人（しろうと）ハ実ト思フベケレドモ、文字ヲ取廻ハサネバ詩ハ作ラレヌ物也。文字ヲ取廻セバ、自ラ経書モ歴史モ見ル事故ニ、日本古、四道ノ儒者ヲ立ルニモ、詩文章ノ学問ヲ経学ヨリハ上ニ置タル事也。

原典主義とも言うべき徂徠学にあっては、古典の理解の正鵠度が、そのまま先王の道の理解度に繋がる。そこでは詩文の実作により「文字ヲ取廻」すことも、経書や歴史の理解に通じる重要な一環として意識されていた。周南もまた、徂徠に倣って中国語の習得に努めるとともに、詩文の実作に励んでいる（注⑧）。周南は徂徠の弟子としては最も早く詩文で名声を得るのだが、その契機となったのが朝鮮通信使との詩文の応酬である。「周南先生墓碑」には、帰郷後間もない正徳二年（一七一二）、周南が赤間関で出迎えた朝鮮通信使との詩の応酬について、次のように記されている（注⑨）。

正徳三年韓使来聘。朝命其所経郡国。例当饗賓使。舟長門封境赤馬関。館焉。侯乃遣諸文学待接。先生与焉。先生年尚少。而与韓諸書記応酬敏捷。文才儁逸。韓人大賞異之。対州雨伯陽亦擯賓。座次交歓先生目以海西無双。韓三使睹先生所作。至因伯陽格外請見先生。詳見問槎畸賞。及先生集中。於是声名籍籍。著聞海内。（正徳三年韓使聘に来る。朝命あり其の経る所の郡国は、例もて当に賓使を饗すべし。舟は長門の封境、赤馬関に至り、焉を館す。侯乃ち諸文学をして待接せしめ、先生焉に与る。先生年尚少し。而れども韓の諸書記と与に応酬すること敏捷なり。文才儁逸にし

て、韓人大いに之を賞異す。対州の雨伯陽も亦賓を擯す。座次先生に交歓し、目するに海西無双を以てす。韓の三使、先生の作る所を睹して、伯陽に因て格外に先生に見ふを請ふに至る。詳かに『問槎畸賞』及び先生の集中に見ゆ。是に於いて声名籍籍として、海内に著聞す。）

周南は韓人に大いに称揚され、対馬藩の雨森芳洲（一六六八～一七五五）にも「海西無双」と賞賛された。この二年後には、芳洲が江戸の徂徠を訪ねていることを鑑みても（注⑩）、この出来事が周南の名声のみならず、徂徠学派の水準の高さを広く世に知らしめる契機となったことが窺い知れる。その後の徂徠と周南の師弟関係は、徂徠の周南宛書簡や、周南の文章においてしばしば自らが徂徠の弟子であることを、誇らしげに書きつけていることなどから知られる（注⑪）。徂徠学樹立以前からの弟子である周南は、徂徠にとってもその生涯を通じて最も親しい理解者だったことだろう。周南の没後、その学問について周南門下の滝鶴台（一七〇九～一七七三）が「周南先生行状」（『周南先生文集』）において、

其学一遵徂徠先生教。以経術文章為宗。（其の学は一に徂徠先生の教えに遵い、経術文章を以て宗と為す。）

と述べていることからも、周南にとって徂徠の影響がいかに強いものであったかが窺える。それは教育論の継承という点においても、決して例外ではないのである。

三　「達材成徳」の教育

元文二年（一七三七）、明倫館初代学頭である小倉尚斎（一六七七～一七三七）の逝去に伴い、山県周南が第二代学頭に就任した。周南は「学館功令」（『周南先生文集』巻九）を定め、明倫館諸生に学ぶ者としての心構えを示した。その冒頭は、

学校之設。達材成徳。上焉以供国家之用。下焉以使有所矜式也。（学校の設は、材を達し徳を成し、上は以て国家の用に供し、下は以て矜式する所有らしむるなり。）

とあり、「達材成徳」の語を用いて、藩校設立の意義と教育理念を説いている。この語は、古い用例では、『孟子』尽心章句上に「有成徳者。有達財者。」（徳を成す者有り、財を達する者有り）と見える。その疏に、「以其有財之具而不能用者。則教而達之也。」（其の財の具有りて用ふること能はざる者を以てすれば、則ち教へて之を達するなり）とあり、身に備わる才能を教育によって伸長することを言う（注⑫）。また、徳を成し遂げる意味での「成徳」の語の用例はさらに古く、『易経』乾に「君子以成徳為行。」（君子は以て徳を成し、行いを為す。）と見られる（注⑬）。

「達材成徳」の語は、こうした中国古典の記述が背景にあるが、ここでは特に、徂徠学の著作における「材」および「徳」の意味するところについて確認し、その上で周南が掲げる「達材成徳」語の具体的

内容を、徂徠の影響から明らかにしたい。

まず、「材」とは何か。『弁名』では、次のように説明している。

才材同。・・・人随其性所殊。而各有所能。是材也。（才・材は同じ。・・・人はその性の殊なる所に随ひて、おのおの能くする所あり。これ材なり。）

徂徠がいう「材」とは、各人が有している才能や個性という認識である。さらに『弁道』では、それは天から与えられたものであり、変化することはないとしている。

変化気質。宋儒所造。・・・且気質者天之性也。欲以人力勝天而反之。必不能焉。強人以人之所不能。其究必至於怨天尤其父母矣。聖人之道必不爾矣。孔門之教弟子。各因其材以成之。可以見已。（「気質を変化す」とは、宋儒の造る所なり。・・・且つ気質は天の性なり。人力を以て天に勝ちて之に反せんと欲するも、必ず能はず。人に強ふるに人の能はざる所を以てすれば、其の究み必ず天を怨み其の父母を咎むるに至らん。聖人の道は必ず爾らず。孔門の弟子を教ふる、各其の材に因り以て之を成すは、以て見るべきのみ。）

孔子の教育は、「各其の材に因り以て之を成す」ものであったとして、徂徠はそこに教育の理想を見ていることが窺える。人それぞれの「材」が異なることを踏まえず、「材」の本質を変えようとすれば、そこに無理が生じ、ひいては「必ず天を怨み其の父母を咎むるに至」ると述べている。『徂徠先生答問書』には、さらに具体的な例を引き、このことについて述べている。

気質は何としても変化はならぬ物にて候。米はいつ迄も米。豆はいつまでも豆にて候。只気質を養ひ候て、其生れ得たる通りを成就いたし候が学問にて候。たとへば米にても豆にても、その天性のままに実いりよく候様にこやしを致したて候ごとくに候。・・・宋儒の説のごとく気質を変化して渾然中和に成候はば、米ともつかず豆ともつかぬ物に成たきとの事に候や。それは何之用にも立申間敷候。

「其生れ得たる通りを成就いたし候が学問にて候」という一文には、徂徠の教育観が端的に示されており、各人が天から与えられたそれぞれの「材」を、いかに育んでいくかに重きを置いていたことが窺える。それでは、各人の「材」を教育によって育てることには、どのような目的なり意図があったのだろうか。『弁道』の一節には、

孔子之道。先王之道也。先王之道。安天下之道也。孔子平生欲為東周。其教育弟子。使各成其材。将以用之也。・・・安天下以修身為本。然必以安天下為心。是所謂仁也。（孔子の道は先王の道なり。先王の道は天下を安んずるの道なり。孔子は平生、東周をさ為めんと欲し、其の弟子を教育し、各々をして其の材を成さしめ、将に以て之を用ひんとするなり。・・・天下を安んずるは身を修むるを以て本と為す。然れども必ず天下を安んずることを以て心と為す、是所謂仁なり）

と述べられており、徂徠にとって教育による「材」の育成は、専ら

「天下を安んずる」という目的に逢着するのである。

ここで、もう一方の「徳」についても見ておきたい。『弁名』において「徳」は、次のように定義される。

徳者得也。謂人各有所得於道也。或得諸性。或得諸学。皆以性殊焉。性人人殊。故徳亦人人殊焉。夫道大矣。自非聖人。安能身合於道之大乎。故先王立徳之名。而使学者各以其性所近。拠而守之。修而崇之。如虞書九徳。周官六徳。及伝所謂仁智孝弟忠信恭倹譲不欲剛勇清直之類。皆是也。蓋人性之殊。譬諸草木区以別焉。雖聖人之善教。亦不能強之。故各随其性所近。養以成其徳。徳立而材成。然後官之。（徳とは得なり。人各々道に得る所有るを謂ふなり。或いは諸を性に得、或いは諸を学に得。皆性を以て焉を殊にす。性は人人殊なる。故に徳も亦人人殊なる。それ道は大なり。聖人に非ざるよりは、安んぞ能く身の道の大なるに合せんや。故に先王は徳の名を立てて、学者をして各々其の性の近き所を以て、拠りてこれを守り、修めてこれを崇ばしむ。虞書の九徳、周官の六徳、及び伝に謂ふ所の仁・智・孝・弟・忠・信・恭・倹・譲・不欲・剛・勇・清・直の如き類は、皆是なり。蓋し人の性の殊なるは、諸を草木の区して以て別るるに譬ふ。聖人の善く教ふと雖も、亦之を強ふること能はず。故に各々其の性の近き所に随ひ、養ひて以て其の徳を成す。徳立ちて材成り、然る後に之に官するなり。）

「徳立ちて材成り、然る後に之に官するなり」の言説が示すように、徂徠のいう「材」と「徳」とは不可離のものであり、各人の個性に応じて「徳」を備えることに努め、その結果として「材」が成り、任官に資する人物にもなり得るとしている。各人が有するそれぞれの個性を伸長しながら身を修め、「天下を安んずる」ためのしかるべき役割を果たす人材を育成することは、徂徠の教育の主眼であったとも言えよう。こうした「材」や「徳」に対する考え方は、周南の『為学初問』に次のように反映している。

人心同じからざること、その面のごとしと言へり。人の性質人々同じからず、品々の生あり。されど礼楽を学び教化を経れば、義理に通じ君子の道を知る故、性質相応の才徳成り立つなり。其器量に応じ、大なるは大官を授け、小なるは小官を授け、百官庶司それぞれに配当して用ひらるる時は、都て国家の用に立たずといふことなし。

「性質相応の才徳」を養い、「其器量に応じ」た形で「国家の用」に供すという考え方は、明らかに徂徠の教育観を祖述したものであり、それはまた「学館功令」における「学校の設は、材を達し徳を成し、上は以て国家の用に供し、下は以て矜式する所有りて使ふなり」という藩校教育の意義とも相通ずるものである。周南による徂徠学の積極的な受容が、自らの教育観ともなって「達材成徳」語を生み、藩校教育の根幹にも据えられることになったのであろう。

四　「長門国明倫館記」における徂徠学の影響

「達材成徳」の語とともに、元文六年（一七四一）、周南が明倫館創設の意義とその経緯を記した「長門国明倫館記」（以下、「館記」―筆者注）においても、徂徠学の影響が認められる。それは、「館記」の後半に見られる次の一節である。

君子若欲綢繆国家。宜莫若学。愷弟君子民父母。（君子若し国家を綢繆せんと欲せば、宜しく学ぶに若くは莫かるべし。愷弟の君子は民の父母なり。）

ここで着目したいのは、「民の父母」の語である。この語は、君子祝頌の詩である『詩経』小雅「南山有台」第三章の、

南山有杞　南山に杞有り
北山有李　北山に李有り
樂只君子　楽しき君子は
民之父母　民の父母
楽只君子　楽しき君子は
徳音不已　徳音已まず

を出典としている（注⑭）。看過してならないのは、この語の援用が、じつは君子のあるべき姿を掲げた、徂徠の教育観を踏まえていることである。さきに触れた、徂徠のいう「材」や「徳」の涵養については、同時に「仁」が重要な観点として引き合いに出される。すなわち徂徠は『弁道』において、

若或不識用力於仁。則其材与徳。皆不能成。（若し或は力を仁に用ふることを識らざれば、則ち其の材徳と与に、皆成ること能はず。）

あるいは、

修徳有術。立其大者而小者自至焉。此孔門所以用力於仁也。（徳を修むるに術あり。その大なる者を立つれば、小なる者自ら至る。これ孔門の力を仁に用いし所以なり。）

と述べているのである。同書によれば徂徠は「仁」について、大局的には次のように捉えている。

孔門之教。仁為至大。何也。能挙先王之道而体之者仁也。先王之道。安天下之道也。其道雖多端。要帰於安天下焉。・・・学先王之道而成徳於我者。仁人也。雖然。士欲学先王之道以成徳於我。而先王之道亦多端矣。人之性亦多類矣。苟能識先王之道要帰於安天下。而用力於仁。則人各随其性所近。以得道一端。（孔門の教へは、仁を至大となす。何となれば、能く先王の道を挙げてこれを体する者は仁なればなり。先王の道は、天下を安んずるの道なり。その道は多端なりと雖も、要は天下を安んずるに帰す。・・・先王の道を学びて徳を我に成す者は、仁人なり。然りと雖も、士は先王の道を学びて以て徳を我に成さんと欲するも、而も先王の道も亦多端なり。人の性も亦多類なり。苟も能く先王の道の要は天下を安んずるに帰することを識りて、力を仁に用ふれば、則ち

人は各々其の性の近き所に随ひて、以て道の一端を得ん。）

徂徠による学問および教育の目的は、要は「天下を安んずる」ことに帰結する。そのための重要な観点の一つに「仁」がある。『徂徠先生答問書』には、「就中君子の道を申候はば、仁の外に又肝要なる儀御座なく候」とあり、徂徠が「君子の道」を語る際、「仁」をいかに重視していたかが分かる。

それでは徂徠のいう「仁」とは、具体的にはどのようなものか。同じく『徂徠先生答問書』には、「仁は慈悲の事と大形は心得候へ共、慈悲に様々御座候故、的切の訓解にては御座なく候」とある。また『孟子』の「惻隠の心は仁なり」の解釈を、「惻隠の心は大形は尼御前などの慈悲に成られ候故、今日取り用ひ難く候」（同上）と斥けた上で、さきの『詩経』小雅「南山有台」における「民の父母」語を持ち出し、「是に踰え候よき註解御座なく候」（同上）、さらに「民の父母と申す所より了簡を付け申さず候へば、それぞれの職分もみな済み申さぬ事に候」（同上）として、さらに次のように述べる。

人の上に立ち候人は身の行儀悪しく候へば下たる人侮り候て、信服申さず候事人情の常にて御座候故、下たる人に信服さすべき為に身を修め候事にて、兎角は天下国家を治め候道と申候が聖人の道の主意にて御座候。たとひ何程心を治め身を修め、無瑕の玉の如くに修行成就候共、下を我が苦世話に致し候心御座なく、国家を治むる道を知り申さず候はば、何の益も無之事に候。是に依て、民の父母と申す所より見開き申さず候はば、何ほどの金言妙句も、孔子の御相傳なされ候堯舜禹湯文武周公の道とは雲泥萬里の相違にて御座候」（同上）

人の上に立つべき君子は、身を修め人々に範を示し導いていくことこそ、天下国家を治める道であり、聖人の道の主意である。それには君子としての徳を示す「民の父母」という観点に立ち戻って考えなければ覚束ないと主張している。徂徠の教育論の対象は、つねに天下国家を治める君子を想定している。そして、周南の『為学初問』においても同様に、君子の理想像を語る際、「民の父母」という語の使用が見られるのである。

君は民の父母なりといへり。世を保つ人は、世は皆我赤子なりと思ひ給へり。大学の教養老序菌の礼を本として、天下に孝弟を教へ給ふ。

さらに、次のようにも語られる。

儒者の道は先王の道なり。先王といふは天下の主にて、民の父母なり。天下に充満したる我子なれば、善も悪もありぬべし。悪ければとて子を棄る道やある。すたらぬ様に謀るこそ、父母の道なるべけれ。

さて、さきに掲げた「館記」もまた、こうした「民の父母」語に象徴されるように、周南が徂徠の教育論を継承し、徂徠が理想とする天下を安んずる人材の育成を踏まえた、藩校教育理念の表明であった。しかし、周南は「館記」においては、こうした徂徠の影響を前面に押し出すことをしないのである。これは「学館功令」における「達材成

徳」語の使用やそれに続く、

昔者我徂徠先生。年方四十始修古文辞。蓋十年。作弁道。先生之於文也。可見焉耳。諸生遊館下。三年為一限。僅得千有余日。白駒之過。可立而竢。朝夕孜孜。務就功令。猶且恐不及焉。（昔我が徂徠先生、年方に四十にして始めて古文辞を修め、蓋ね十年にして『弁道』を作る。先生の文に於けるや、焉を見るべきのみ。諸生の館下に遊ぶは、三年を一限と為し、僅かに千有余日を得るのみ。白駒の過ぐるは、立ちて竢つべく、朝夕孜孜として務めて功令に就くも、猶且つ及ばざるを恐る。）

のように、徂徠学を堂々と標榜しているのとは対照的である。

明倫館は、享保四年（一七一九）に五代藩主毛利吉元（一六七七～一七三一）により創設された藩校である。吉元は林大学頭信篤（一六四四～一七三二）に朱子学を学び、聖廟に安置する孔子と四賢（子思・顔子・曾子・孟子）の木主の尊号も信篤の揮毫になる。また、初代学頭を務めた小倉尚斎も、京都で伊藤坦庵（一六二三～一七〇八）に師事し、のち江戸に赴いて信篤の門に入るなど、そもそも明倫館はその創設に際して朱子学を標榜する藩校であった。

元文六年（一七四一）六代藩主毛利宗広（一七一七～一七五一）は、明倫館創設の由来を永く後世に伝えようと、周南に碑文の撰記を命じている。その碑背には創設に尽力した人物の名が刻まれているが（注⑮）、それを見ると「当職　桂主殿　大江広保」（桂広保）など、藩内で徂徠学に批判的だった朱子学派の重臣（注⑯）も名を連ねている。周南は「館記」を撰するに際して、そうした館創設からの諸事情、徂徠学への批判といった一連の経緯を踏まえた懐柔とも思われる記述に努めているのである。

中葉以来。国史失官。降及戦国。喪乱相尋。制度陵缺。先王之大経大法。殆乎熄矣。当是時也。干戈為政。庠黌無聞。神祖武成。帥諸侯而紀政。乃徴林羅山氏。咨詢時務。於是儒教蔚興。海内嚮風。爰逮憲廟。興学宮飭祀典。（中葉以来、国史は官を失ひ、降りて戦国に及び、喪乱相尋ぎ、制度は陵缺し、先王の大経大法は殆ど熄めり。是の時に当って、干戈もて政を為し、庠黌聞くこと無し。神祖〈徳川家康〉武成り、諸侯を帥ゐて政を紀す。乃ち林羅山氏を徴し、時務を咨詢せしむ。是に於て儒教蔚興し、海内風に嚮ふ。爰に憲廟に逮び、学宮を興して祀典を飭ふ。）

「館記」が撰された当時、すでに徂徠学は江戸でも広く浸透し（注⑰）、藩内においても周南は藩主宗広から全幅の信頼を得ていた（注⑱）。そうした外的な諸条件に加え、何よりも周南自身が著した「学館功令」に象徴されるように、学頭職にある自らが徂徠学の主流となった明倫館を体現していた。

それにも関わらず、「館記」の記述はむしろ林羅山（一五八三～一六五七）にはじまる朱子学の勃興を高く評価している。そのため一見したところ、明倫館創設以来の朱子学の影響下に記されたものと誤解されやすく思われるが、実際にはさきの「民の父母」語の援用に、明らかに徂徠の影響が認められるのである。

五　結び

「達材成徳」の語そのものは、徂徠の『弁道』『弁名』などには見られないことからも、天下を安んずる人材の育成を目指した徂徠学の教育論を端的に言い表したものとして、周南により用いられるようになった言葉であろう。その後、周南の高弟の一人である滝鶴台が「周南先生行状」において、明倫館諸生に対する周南の教育姿勢を、「才を育み徳を養ひ、訓励怠らず」と記していることは、徂徠学の教育論の系譜が周南の弟子までも浸透していたことの傍証となろう。また、「館記」における「民の父母」語にも、同じく徂徠学の教育論の影響が認められる。

従来、明倫館の教育に、周南を媒介とした荻生徂徠の影響が見られることは指摘されながらも、それは明倫館成立以後に記された『政談』の記述や、徂徠が周南を通して坂時存、毛利広政といった明倫館創設に関わる人物と交流があったことを傍証とする指摘であった（注⑲）。そこで小論では、さきの二語に着目することによって、これまで等閑視されてきた観点から、周南を媒介とした明倫館教育への徂徠学の影響の一端を指摘した。

さらにもう一点、「達材成徳」の語に関わる明倫館への徂徠学の影響を指摘しておきたい。

享保四年（一七一九）二月の明倫館落成式において、五代藩主毛利吉元は自ら聖廟を拝し、今後大いに人材を涵養しようとする旨を告げた。じつは、この際の告文（「明倫館落成祭先聖告文」）は、山県周南の草したものであり『周南先生文集』（巻九）に収められている。この告文に次のような一節がある。

新興学舎。旁置習武之場。以教子弟。庶幾人或有自覚成徳達材。裨余責任。以分付托之重。（新たに学舎を興し、旁に習武の場を置き、以て子弟を教ふ。ねが庶幾はくは人或は自覚して徳を成し材を達し、余〈毛利吉元〉が責任を裨けて、以て付托の重を分かつこと有らんことを。）

明倫館がその創設に際して、朱子学を標榜した藩校であったことはさきに触れた。その明倫館落成式の告文中に、徂徠学の教育論の象徴とも言える「成徳達材」の語を用いているのである。徂徠の『弁道』『弁名』は、享保二年（一九一七）には脱稿している（注⑳）。当時、江戸で藩主の侍読を務めていた周南は、徂徠との意思の疎通も充分可能だったはずであり、早い段階でそうした著作にも触れていたことが考えられる。これによれば、具体的にはすでに享保四年の創設当初から、周南を通じて同館の教育に徂徠の影響があったことを指摘し得るのである。

この事実は藩主吉元をはじめ、藩内の朱子学派の人々が「成徳達材」の語に徂徠の影響を見ることがなかった結果なのか、あるいは明倫館がその創設当初から徂徠学に対しても寛容であり、朱子学との均衡が図られていたことを示唆するものなのか。ここでは、当該研究の重要

な課題の一つとして提起するに止め、この問題についてはまた別に論じたい。

注

①私家版、一九九〇年。同書における「長州藩徂徠学」に対する認識は次のようであり、筆者も問題意識を共有するものである。「長州藩徂徠学は今日見捨てられている領域である。もとより長州藩徂徠学という呼称は市民権を得たものではないが、山県周南によって長州藩にもたらされた徂徠学は、藩校明倫館に象徴される藩の文教政策史の影に埋れてしまっているのが現状である。従来、長州藩の儒学についての先達の研究がなかったわけではない。しかしそれは個々の学者の閲歴に止まるもので、一つの学統としての彼等の活動の幅やその思想的営為の内容、また長州藩士のメンタリティにどのような影響を見せているのか等、すなわち思想史として捉えようとするものではなかった。彼等の存在は明倫館の点景として取り扱われるに過ぎなかったのである。長州藩徂徠学についての研究が深まらないのは当然であろう。一つの学統としてのその全体像の把握は放置されたままの状態にある。」

②前掲書、二章―三「周南の教育論」。

③山県周南の著述については、『周南先生文集』（山口県立山口図書館蔵）をテキストとして巻次を示した。『為学初問』については、井上哲次郎編『日本倫理彙編』（育成会、一九〇一年）所収のものに拠った。

④『荻生徂徠集』（日本の思想一二、筑摩書房、一九七〇年）所収。

⑤岩崎允胤『日本近世思想史序説』第一章「儒学における古学思想の展開―荻生徂徠と古文辞学―」（新日本出版社、一九九七年）に詳しい。

⑥吉川幸次郎「徂徠学案」（『荻生徂徠』（日本思想大系三六、岩波書店、一九七三年）、また岩崎前掲書「Ⅴ　朱子学と仁斎学の批判」に、当該内容の要点が述べられる。ただし、周南においては、伊藤仁斎の影響が見られることも指摘されている（河村前掲書）。

⑦徂徠の著作のうち、『弁道』『弁名』の原文および『政談』については、前掲の『荻生徂徠』所収のものに拠った。ただし、前二書の書き下し文は適宜改めた。また、『徂徠先生答問書』は、『荻生徂徠全集1』（みすず書房、一九七三年）に拠った。

⑧周南における詩文の重視については、河村一郎『長州藩思想史覚書』（私家版、一九八六年）参照。『周南先生文集』には、五言古詩（十六首）、七言古詩（六首）、五言律詩（三十首）、七言律詩（五十三首）、五言絶句（十三首）、七言絶句（百二十三首）の計二百五十一首が収められている。

⑨滝鶴台「周南先生行状」（『周南先生文集』所収）にも同じ内容が載る。また、この際の詩文唱酬については、信原修「正徳辛卯信使の来日と詩文唱酬の実態―山県周南・当壮菴一族らを中心に―」（『朝鮮学報』第百六十二輯、朝鮮学会、一九九七年）に詳しい。

⑩今中寛司『徂徠学の史的研究』（思文閣出版、一九九二年）。
⑪『徂徠集拾遺』所収の周南宛書簡、『周南先生文集』所収の「学館功令」（巻九）、「上国相桂君」（巻十）、「送三浦生之京師序」（巻六）などから窺える。
⑫『孟子注疏』（『十三経注疏』中華書局、所収）に拠った。
⑬『周易正義』（同上）に拠った。
⑭白川静『詩経雅頌1』（平凡社、東洋文庫、一九九八年）に拠った。
⑮『毛利十一代史』巻六十三（名著出版、一九七二年）。
⑯河村『長州藩徂徠学』。
⑰今中前掲書。
⑱「周南先生行状」に、「及観光侯立。又命侍購読。侯好学尊賢。有光于先侯。親敬先考。倍於往日。侯東則従。居則毎在左右。顧問応対。眷遇益渥。」（観光侯立つに及んで、又命ぜられ購読に侍す。侯は学を好み賢を尊び、先侯に光有り。先考を親敬すること往日に倍す。侯、東すれば則ち従ひ、居れば則ち毎に左右に在り。顧問応対し、眷遇益々渥し）とある。
⑲河村前掲二書、小川国治「享保期長州藩の文教政策と藩校明倫館」（『日本歴史』五八九号、一九九七年）。
⑳辻達也「政談」解題（前掲『荻生徂徠』所収）、今中前掲書。